
君に『サヨナラ』を…/沖神

いとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に『サヨナラ』を…／沖神

【Nコード】

N0328K

【作者名】

いとり

【あらすじ】

“最後”だなんて、言わないで…

(前書き)

今日は、ひとりです。

連載中の次話ネタで悩み、息抜きとして書きました。

はつきり言うと、…酷い!▽×)↑

展開の速さに、作者本人も驚きですよ↑

それでも気にしないよ!という心の広い方は、暇つぶしにでも読んで頂けると嬉しいです。

では。

「…何だヨ、何か用アルか？」

「いや…、ただ少し挨拶に来ただけでさア。」

仕事がなくて万事屋で暇していた時、突然彼が訪ねてきた。

どうせまた、嫌がらせにでも来たのだろうと思った。

「挨拶…って、何アルか？」

「明後日から、仕事で…遠くに行く事になったんでさア。」

「……」

「今日はそれを言いに来ただけでさア。」

彼の言葉を聞いて、一瞬心臓が止まったかと思った。

「…いつ、帰って来るアルか？」

「…分かんねエ。それと、生きて帰って来るかも分かんねエ。結構、ヤバイ所行くからな。」

—…何、それ。

「だから、明日、勝負しましょうぜい。」

「は…？」

彼の突然のお願いの趣旨が分からなくて、思わず聞き返してしまった。

「お前とはまだ決着ついてねえからな。…もしかしたら、明日で“最後”になるかも知れねえし。」

「……………」

じゃあ、明日公園で、と言い残して彼は去って行った。

私は暫く玄関で立ち尽くしていた。

訳の分からない焦りが、胸の奥で渦を巻いていた。

胸が苦しくて、息が上手く出来ない。

―…何アルか、コレ…。

そう思ったのと同時に、後ろから銀ちゃんの声がした。

「神楽あ、今沖田君だったろ。何か依頼でも来たのか？」

「……………」

「…おい、神楽、お前どうした？さっきからずっと固まって…」

そう言いながら、銀ちゃんが私の肩を掴んで、自分と向き合わせた。

「銀ちゃん、…あいつ遠く行くなって…。生きて帰って来るかも分かんないって……。」

「……………」

「…どうしよう、何か胸が押し潰されそうで苦しいアル。…頭可笑しくなりそうヨ。どうしよう…怖いヨ…ッ！！」

そう叫ぶと、銀ちゃんは優しく抱き締めてくれた。

耳元で、落ち着け、と何回も言ってくれた。

私はただ、銀ちゃんの腕の中で訳も分からず泣いた。

＊
＊
＊

「…来やしたね。」

「……。」

約束通り、次の日に公園に行くと、彼が先に待っていた。

「おせーから、逃げたかと思いましたぜイ。」

そう言って、彼はクスクスと微笑していた。

「…んな事、するかヨ。」

言い終わると、彼が刀に手を掛けた。

「それじゃあ、…始めましょうか。」

「……。」

自分に降り懸かって来た刀を、傘で受け止める。

ぶつかった瞬間に、高い音が響いた。

ギリギリと傘が刀に押される。

そんな中、急に昨日の事を思い出した。

『明日で“最後”になるかも……』

！……！

派手な音がして、持っていた傘が宙を舞った。

「……………あ……。」

同時に足の力も抜けて、その場に崩れ落ちた。

「チャイナ、…お前本気出してねえだろイ。」

「…………。」

彼が刀を仕舞い、こちらに近付いて来た。

私はまだ立てずに、俯いて地面に座っていた。

「…どういうつもりでィ？せっかく決着付けようとしたのに、これじゃあ勝負になんねーだろィ。」

「…………。」

「おい、聞いてんのか。馬鹿チャイナ…」

そう言って、彼は私の顎を掴んで上を向かせた。

—…どうして？

「え……—」

—…いつから？

知らない間に目から涙が流れていた。

涙が落ちて、地面には丸い模様が出来ていた。

目の前には驚いた顔の彼。

「チャ……」

「……言うなヨ。」

「え……？」

いつの間にか、

「“最後”とか言うなヨ!!」

自分の中で、彼が“特別な存在”になっていた。

「“最後”って何アルか！？“生きて帰って来ない”って何アルか！？…何で…ッ何でそんな事言うネ！」

そう叫んで、彼の肩をドンドンと叩いた。

「おい、チャイナ…」

「そんな仕事、しなきゃいいじゃねえかヨ！」

彼に声を掛けられても、口が止まらなかった。

心では駄目だと分かっているのに、身体が言う事を聞かない。

心と身体の反比例。

苦しくて、哀しくて、息も上手く出来ない。

「け…喧嘩がしたいなら、いつでも相手になるネ…。だから、だから…ッ…」

—…お願いだから、1人にしないでよ。

最後まで言葉が出なかった。

彼の腕の中に、抱き寄せられていた。

「…悪かった、訂正する。“最後”じゃねえよ。死にもしねえ…。帰って来たら、また勝負してやりませア。」

「……本当、アルか…？」

「ああ…、だから泣くな。」

「……………」

暫く、彼の温もりを全身で感じていた。

—……凄く、落ち着く……。

あと1秒だけでもいいから、このままでいたいと思った。

私に触れる優しい手が離れないようにと、彼に強くしがみついていた

た。

彼は私が泣き止むまで、ずっと抱き締めてくれた…。

*
*
*

「…じゃあな。」

「うん…。」

時間は常に一定のはずなのに、別れの日は直ぐにやって来た。

―…ああ、本当にお別れなんだ。

「チャイナ、手ェ出せ。」

「……？」

言う通りに手を出すと、小さな赤い箱を渡された。

―…あ、酢昆布…。

「好きなんだろイ？」

「うん…。」

「だったら喜んで下せエ。」

「え…。」

「…俺は、笑ってるあんたが好きなんでさア。」

「……ッ。」

そう言われたのに、涙が出た。

―…笑わなきゃいけないのに…。

でも、出来なかった。

ただただ、貰った酢昆布の箱を強く握り締めていた。

―…やっぱり

「やっぱりやだヨ。…離れたくないアル。」

そう言うと、彼は困った顔をした。

我が儘だって分かってる。

嫌われたって仕方ないと思う。

でも、…それでも嫌なんだ。

私と彼を隔てる、“距離”という高い壁が…。

「……チャイナ……」

彼がそう言った瞬間、後ろから聞き覚えのある声が耳に入った。

「いやあ…、女を泣かすなんて…沖田君も罪なヤツだねえ。」

「…旦那!？」

「銀ちゃん!？」

後ろには銀ちゃんが立っていた。

すると今度は別の声。

「本当、水臭い男ですね。沖田さんも。」

「メガネ…?」

「…銀ちゃん、新八…どうして此処にいるアルか?」

私達はまだ状況を把握仕切れなかった。

「いやあ、沖田君が1人でそんな危険な所行くなんて、どんなに強くたって危ないと思ってよ。」

「護衛しようって、銀さんと決めたんです。」

「え……?」

「…銀ちゃん、マジでか!?!」

「おう。」

「ちょ…、旦那待って下せエ。それじゃあ旦那達の仕事が…」

彼は突然の出来事に、まだ困惑しているようだった。

「残念。万事屋は今、依頼が来なくて暇で暇で仕方ねえんだ。それに…」

銀ちゃんが私の方を見た。

「ヒロインが笑ってなきや、意味ねえだろ？」

「…銀ちゃん…」

「…………ふ。」

隣りにいた彼が、クスクスと笑っていた。

「やっぱり敵いませんね、旦那には…。」

「サド…？」

不思議そうに彼を見上げると、彼は少し微笑んで私を見た。

「…お前も、護衛頼みますぜエ。」

！……！

「いいアルか！？」

これで……

「ああ。」

君に『サヨナラ』を言う必用もないね……

「…じゃあ、そろそろ行きましようか？」

「おう！」

差し伸べられた手を掴んだ。

もう二度と、離れる事のないように…―

「…ちょっと、お2人さん。俺等の事忘れてない？」

「嫉妬しねえで下せエ、旦那。」

「してねーよッ!!」

涙はもう止んで、いつの間にか笑顔になっていた。

『笑ってるあんたが……』

君が隣りにいてくれるなら、いつだって笑うよ。

だから、この繋いだ手が、ずっと離れませんように……。

君に『サヨナラ』を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328k/>

君に『サヨナラ』を…/沖神

2010年10月21日23時07分発行